

Mランド ニュース

夏めくや 山ふところの 影ふかし



編集・発行
Mランド 益田校
発行責任者 谷口 ひとみ

〒699-5131
島根県益田市安富町 3330-1

TEL 0856-31 5050

FAX 0856-25 1540

HP <http://www.mland-masuda.jp/>

Email info@mland-masuda.jp

皆さまからのご意見ご感想を
お待ちしております

【 Mランド歳時記 】

8月...【夏祭り】

Mランドの夏は、若者の熱気とエネルギーでヒートアップ度200パーセント!! 夏の風物詩ともなった夏祭りイベントでは、かき氷やお好み焼き等の夜店で舌鼓を打ち、ゲストとスタッフが一体となって繰り広げるステージ上のチャレンジ披露を楽しみ、夏の夜を満喫します。

日本海でバーベキュー&マリンスポーツを楽しむ!

日本海を満喫したゲストたち

毎年恒例となった夏のイベント「日本海の夕日を見ながらのバーベキュー」が、七月十二日(日)に開催されました。

今回は、ゲスト二十三名のみならずが参加され、最初に益田マリンスポーツ協会の方たちの協力の下で、バナナボートやウエイクボードなどのマリンスポーツを体験しました。ウエイクボードはスノーボーの水上版、ジェットボードを引っ張って水面を滑るといったものです。みなさん、一所懸命がんばるのですが、なかなか水面に立ち上がれず、悪戦苦闘している場面も見受けられましたが、初めての日本海を満喫されたようです。

マリンスポーツを楽しんだ後は、全員で海岸の清掃を行ない、気分もスッキリしたところで、待ちに待ったお食事タイムです。食事は、飯ごうでご飯を炊き、肉や海鮮類を焼き、みんなで楽しくいただきました。食事タイムが終わり、みんなで後片付けしてから、日本海に沈む夕日を鑑賞しました。大自然の優麗さ(ゆうれん)にしばし時の経つのを忘れ、心のリフレッシュ

この後、うまく立ち上がったかどうかは、ご想像におまかせします。



マリンスポーツ協会の人がいねいに指導してくれました。



「こんな楽しいイベントが待っているなんて思いもよらなかった。」バナナボートに乗り、気分最高のゲスト三人組。

レッシュをされたゲストの方々の顔が印象的でした。

「バーベキューの締めはやっぱりスイカだね」満足そうな二人。



久しぶりの焼き肉に笑顔もこぼれます。



お世話になった浜辺を清掃するのも気持ちいいものです。



初めての飯ごう炊飯、「うまく炊けるかな?」飯ごうの中には、清流日本一の高津川の鮎も入っています。

100kmマントラ体験記

オフィサー 水津 裕一

残り五キロメートルさつき撃った右足が痛い・・・街に向かう一台の車が速度を落とし、運転していた年配の男性に声を掛けられた。「さつきからたくさんの方が歩いていて、何かあるのかい」、その問いに私は、「Mランドの社員研修で益田市内を百キロメートル歩いているんです、男性は笑顔で、「そうか、がんばれよ!」、何気ない会話なのに力が湧いてきた。足も痛くなくなっている。

三十キロメートルまで六人で一緒にいたのが、五十キロメートルでは二人、七十キロメートルからは、とうとう一人になってしまった。あれから二十五キロメートル無心で真っ暗な中を歩いて今六時三十分過ぎ、もう少しで横田町に着くところ、最後のチェックポイントまでもう少し、絶対完歩するという思いだけで歩いてきた。「ホ・オポノポノ ホ・オポノポノ」何度このマントラを唱えただろう。

ここまで来れたのも、今この瞬間も場所は違うが一緒に歩いている仲間や、自分のこと以上に物心両面からサポートしてくれているスタッフの人たち、自分たちがこの研修に臨めるよう業務に励んでくれている社員の皆さん、そして、家族や福原益田市長をはじめ周りの多くの人たちの援助のお陰である。

自分一人ではない。関係性の中に自分があるということを感じ、心で感じる事ができる。何だか涙が出る、苦しいとか、悲しいとかではなく、何だか分らないけど涙が出てくる。人は不思議だと思ふ。この自分が踏み出す一歩一歩、自分が大地を歩むことにより、この地球・宇宙と一体になっている気がしてくる。

そもそも、この百キロメートルチャレンジウォークを企画したのは、今のこの時代を乗り越えるためには、組織による組織力が必要不可欠なのは当然のことであり、その組織力そのものを動かす、推進力としての個々の力、人間力が必要不可欠であり、人は目の前の壁に向かうとき、全力でそれに立ち向かいますが、その自我の限界と感じているものが、果たして本当の限界なのか、その限界を超えることができたとしたら、素晴らしい自己と向き合えるのではないかと、今までの観念により、無理であると思うことに対し、できない理由ではなく、できる方法への思考・行動の転換、新たな価値観とコンパス(指標)の確立を目指し、個々のやろうという意識の芽生えを重要視し、「己の限界を超えることができたら」をテーマに企画しました。

十八名チャレンジ、完歩者六名、最短完歩時間二十三時間、初めてのチャレンジは終わりました。来年から、「益田百キロメートルウォーク」



日本海に沈む夕日を背に思い出の一枚。

に名前を変え、今年と同じナンバー1(ワン)の日に開催し、Mランドの伝統として、創り上げていきます。最後、ゴールであるMランド下まで帰ってきた時、私の妻と子どもが笑顔で出迎えてくれた。嬉しかった。この自分を見つめつつ、宇宙と一体となる百キロメートルチャレンジウォークは、最高に楽しい研修です。是非多くの方に体験してもらいたいです。

自分一人ではない。関係性の中に自分があるということを感じ、心で感じる事ができる。何だか涙が出る、苦しいとか、悲しいとかではなく、何だか分らないけど涙が出てくる。人は不思議だと思ふ。この自分が踏み出す一歩一歩、自分が大地を歩むことにより、この地球・宇宙と一体になっている気がしてくる。

そもそも、この百キロメートルチャレンジウォークを企画したのは、今のこの時代を乗り越えるためには、組織による組織力が必要不可欠なのは当然のことであり、その組織力そのものを動かす、推進力としての個々の力、人間力が必要不可欠であり、人は目の前の壁に向かうとき、全力でそれに立ち向かいますが、その自我の限界と感じているものが、果たして本当の限界なのか、その限界を超えることができたとしたら、素晴らしい自己と向き合えるのではないかと、今までの観念により、無理であると思うことに対し、できない理由ではなく、できる方法への思考・行動の転換、新たな価値観とコンパス(指標)の確立を目指し、個々のやろうという意識の芽生えを重要視し、「己の限界を超えることができたら」をテーマに企画しました。

十八名チャレンジ、完歩者六名、最短完歩時間二十三時間、初めてのチャレンジは終わりました。来年から、「益田百キロメートルウォーク」

「益田百キロメートルウォーク」

序盤の足ならし、まだ余裕のある参加者たち。

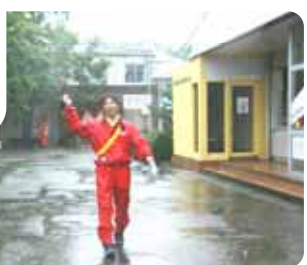


大雨の中、余裕のポーズの城市インストラクター。



出発式で激励の言葉を述べられた福原市長さん(前)。

雨の中一番でゴールした水津オフィサー、手を上げて出迎えの人たちに応えた。



100 kmを完歩し、小河会長、中島室長に出迎えられた有福インストラクター(左)。

会長のひげざき



小河 二郎 会長

「心の運転は 加点方式」

一つ例え話をしてみましょう。若い人たちが将来調理師を志す目差します。フランス料理のシェフを志す人は、高級フランス料理店をホテルかどこかで見つけて、そこでコース料理を食べて舌を鍛えるでしょう。レストランで西洋料理を目差す人もやはり評判の良い店を見つけて、いい料理、美味しい料理とはどんな料理か、学ぼうとするでしょう。日本料理でも繁盛店や有名料理店、寿司

屋、そば、天婦羅屋、美味しいという店を探して食べに行きます。わざわざ漬れそうな誰も行かないような店を探して、まずいい料理を食べて、なぜ美味しくないかを追求する人は、まさかないでしょう。人は皆、まささという不完全さを含まない、完全なフランス料理や日本料理を知ろうとするはずで、不完全さをいから分析しても完全さを知ることはできませんし、そのためにそこに至る方法を見出すこともできません。これと同じことが、運転技能でも言えると思います。どれほどできなかったことを詳細に分析しても、格好いい運転や安全運転という心の運転を追求することはできないはずで、そうです、私たちMランド人として願っているのは、心の時代にふさわしい心の運転です。

心の運転とは人間らしい、人に譲ることができる、美しい運転のことです。その可否の決定は、まずいい料理を食べてみる減点方式ではなく、

美味しい料理を目差しているかどうかの加点方式が自然です。「できる」「もう少しだ」「がんばれ」「立派だ、素晴らしい」「ありがとう」等々の加点方式であるべきです。

成長の人 NO.16

今回紹介する成長の人は、入社六年めの西藤インストラクターと入社五年めになる島本、福富インストラクターです。

彼らは、普通車の指導員として経験を積み、今年更なるステップアップのため、五月二十七日に行なわれた普通二輪指導員審査に臨みました。Mランドのライダーチームは県下でもトップクラスの技術を持った指導員が多く、彼らにとつては、ずっと憧れの存在だったようです。

二輪指導員審査では、面接と技能試験があり、高い運転技能と知識が求められます。そのため、彼らは、今年の一月から約半年間、休憩時間や休日ですべて練習と勉強に費やしてきたそうです。

今回、見事二輪指導員審査に合格した福富インストラクターは、指導員になるための苦労と今後の抱負を次のように語ってくれました。

私は、免許を取得するときから苦意識があり、練習中何度も転倒し、痛い思いをしてきました。ライダーチームの先輩からは「転げてうまくなる」と言われ、早く先輩方に追いつけるように必死でがんばりました。たくさんの方々のサポートがあり、充実した練習を行いました。その結果、三人全員合格を果たすことができ、今夏から二輪教習に従事することになりました。二輪教習を行なうことで、知識も

増え、学科や普通車の教習レベルも上がると言われています。二輪免許は十六歳からの若年層の方が多く来られるので、運転テクニクだけでなく、安全運転とはどういうものか、交通社会人としての自覚と責任の重さを伝えていきたいと思っています。そして、これから自分の趣味を見つけてよと思っている方、是非、二輪免許にチャレンジしてみてください。バイクは危ないと思っている人が多いですが、安全に乗ればこれほど楽しい乗り物はありません。これから免許を取る人に夢を与えられるよう、私たち三人も熱心に指導していきます。



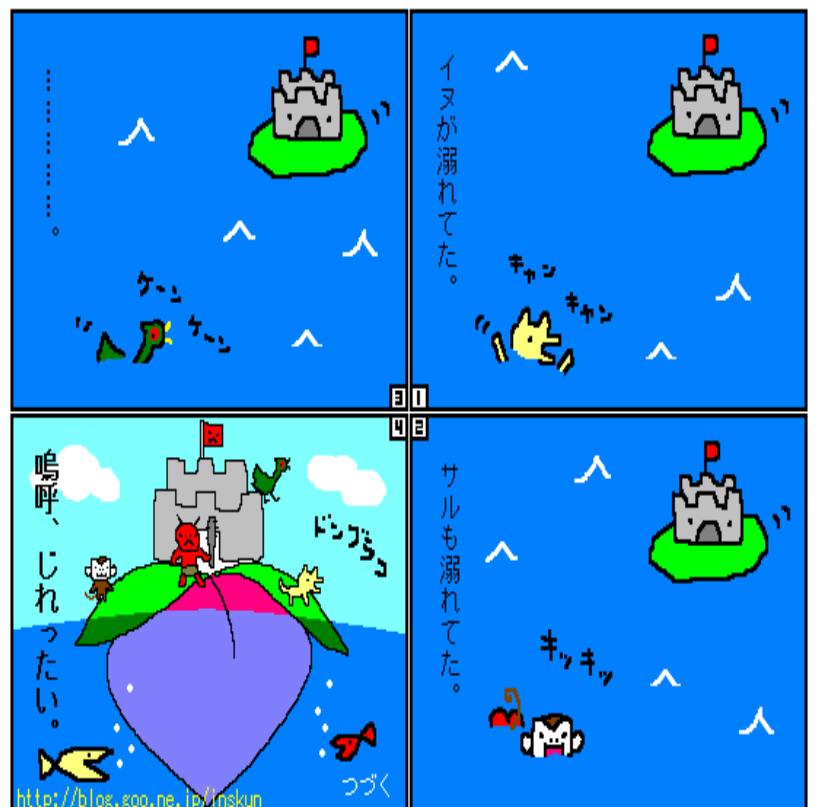
大型二輪教習車を前に、ステップアップを共に喜ぶ福富、島本、西藤インストラクター（左から）。

『青年塾』益田講座開催

六月十九日から二十一日までの三日間、志ネットワークの上甲 見代表が主宰する『青年塾』十三期生西クラス第一回講座が、Mランド益田校で「志のソートリーダーMランドに学ぶ」というテーマのもと開講されました。

この三日間で、このMランドでいふことを身をもって経験しようとする塾生（二十一名）の姿が見受けられ、小河会長による講話「Mランドの志」では、塾生の一人ひとりが一つでも多くの学びを持ち帰ろうと活気ある質疑が飛び交い、内容の

Ver.32 《ももたろう第8話》



小冊子発刊のご案内

Mランドの相談役である松岡浩さんが会長を務める株式会社タニサケ発刊の社内報『フレッシュタニサケ』が、この九月で二十周年を迎え、これを記念して、小冊子『益はなくても、意味がある』をMランドにて発刊しました。

この小冊子は、これまで発刊された『フレッシュタニサケ』に掲載されたものを中心に構成されており、松岡相談役の人生観がうかがわれる内容となっています。百年に一度の大不況といわれる今だからこそ、読んでほしい一冊です。



《お申し込みは》
Mランド
0856(31)5050
株タニサケ
0585(45)8555
頒価 四〇〇円(送料別) まで

Mランドインストラクター 13



マイナスイオンが充満した「いやしろ地」Mランド。

「いやしろ地」けがれ地

土地には、「いやしろ地」とけがれ地があると言われています。「いやしろ地」とは、人の心に癒（いや）しを与えてくれる土地・場所という意味です。また「けがれ地」は、まったく逆の意味を表します。ここMランドの構内は、「いやしろ地」です。

Mランドでは、年月を経て、笑顔や挨拶が日常化し、優しい気持ちが充満し、リラククスできるいい空間が醸成されてきました。感謝の気持ちを表す「サンキューレター」や「感性カード」、トイレ掃除を通して自分の心を磨く「重美塾」。校内掃除の「一美塾」。これらボランティアの中に流れている優しい気持ちが沁（しみ）み渡り、「いやしろ地・Mランド」ができあがりました。

また、マイナスイオンの出る、身体にいい土地になるようにグラビトンセラミックによる波動の交換と境界を行なっています。みなさんも五感を研ぎ澄まして、そのエネルギーとマイナスイオンの力を感じとってみてください。きっと、明日へと向かって生きる活力をますます高めることができるにちがひありません。

濃い講演となりました。

また、早朝のボランティア活動の校内清掃にも参加し、自分主義から他人主義の志を培い、感性を磨きました。

人間力を高めるため、人に関心をもち、そして人のために行動する、Mランドの志」を肌で感じる事ができた、益田講座となりました。



小河会長宅の庭園鑑賞、そしてお茶を差し上げ、伝統的日本文化を味わっていただきました。